

市井小説

酒甕と骸

(さけがめとむくろ)

丹野 彬

一

おめえさん、さつきからあつしの脛にまつわりついて、何かご用でもあるんですかい。それとも何だね。あつしを、材木町甚平長屋の、大工の長吉さんと知ってのことですかい。もしかして、あつしを見込んで犬小屋でも新築してもらいてえなんて、云いだすんじゃないかね。

そりゃ、頼まれりゃ、越後の国から米搗きに来なさると云うじゃねえか。お犬さまとて、頼まれりゃ、断わる謂われもねえ、お人好しの長吉さんと、長屋のお梅さんにでも聞いて来なすったかい。そうだとしたら、さっさと云ってみな。少々酔っ払っちゃいるが、あつしなんざ、犬小屋の一軒や二軒は朝飯前なんだからさ。

それでなんだね。家が欲しいだなんて、かかあ(鼻)にせがまれて、その気になったと云うのかい、そりゃ偉いねえ。

だけどさ、見上げてごらんよ。夕焼けがまつこときれいじゃねえか。ガキのころに死んだおつかさんのことを想い出して、なんだか寂しくなるじゃねえか。

やい、こら。こんな黄昏どきに、かかあをほったらかして、酒飲みの甲斐性なしの長吉さんについて来るなんざ、そんな放蕩なことしちゃいけねえぜ。たちまち、かかあに焼き餅やかれて、つまみ出されて、路頭に迷っちゃまうぜ、あつしのようにな。

それとも何だね。あつしに惚れたとでも云うのかい。そうかい、あつしに惚れたとは、おめえさんも眼が肥えてるな。いまはこんな薄汚ねえものを羽織っちゃいるが、そりゃ若けえ時分にや、角材を担いで梁の上をびよんびよん飛び跳ねる恰好よさに、町娘が黄色い声を張り上げたもんだぜ。

おっとと、そんなにじゃれるもんじゃねえよ、貧乏徳利が危ねえじゃねえか。こんな大事なものを割っちゃったら、悔やんでも、悔やんでも、おらあ悔やみきれねえ、てめえを一生呪ってやるからな。食い物の恨みは恐ろしいと云うじゃねえか。

だけど袖触り合うも他生の縁、一杯ぐれえならかまえやしねえから、さあ、こっちの柳の下においで、隅田川の風が心

地いいよ。

おい、こら、ワン公。どこに行くんだ。せつかく奢ってやろうと云つとるのに、橋のたもとのお嬢ワン公なんぞに尻尾をふつて、まったくあきれるねえ。そんな浮気心じゃ出世できねえぜ。あれ、あれ、とうとう付いて行ってしまいやがった。

なんだい、ちくしょう、あつしをコケにしやがって。ワン公は浮気者だねえ、こんど会ったら承知しねえからな。

二

おやおや、その娘さん、河原に身を屈めて身投げでもしようてのかい。見てみなよ、ゆったりとうねった隅田川の流れ、おもわず吸い込まれそうだぜ。背筋がゾクとするね。そんなところでうろうろしてちゃ危ねえぜ。さあ、さあ、はやく上がっておいで。

見たところ、その旅姿では江戸のお方じゃござんせんね。なに、奥州からはるばるやってきたって云うのかい。足に豆をこさえて大層難儀の道中だったろう。見渡したところ、お連れさんはおらんようじゃが。

なあんだ、叔父さんと一緒なんだって。

そうかい、そうかい、連れがいると聞いて、あつしも安心したぜ。娘の一人旅など、いつ追剥に襲われて、身ぐるみ剥がされるかしれやしないんだから。

ところで、そんなに臉を腫らして、いったいどうしたと云うんだい。まるで岡場所にでも身売りするような悲しい顔つきだよ。ほんとうのことを、打ちあけてごらん。

えっ、連れというのは人買いだって。まさか女衞のことはあるめえな。

生家は絹問屋だけれど、ちゃん(父親)が身を持ち崩して、借金の形に江戸に連れてこられたと云うのかい。ちゃんも甲斐性なしだねえ。まるでどこかの誰かさんとそっくりじゃねえか。へへっ、そんなにあつしを見詰めねえでくれ。

それで、娘の身代わりに生家が立ち直ったとなりや、おまえさんもたいそうりっぱな親孝行をしたもんだ、ほんとに涙がでるねえ。

女衞のおらぬまに、こんなこと聞いちやなんだが、その金子とやらはいかほどなんだい。

ふむ、十両ときたか、十両ともなりや、そりや大金だ。あつしの懐の巾着に五両入ってんだが、こいつは手放せねえ大

事な金子なんだ。

あつしはねえ。手元に徳利がありや何んにもいらねえ。酒は百薬の長つて云うじゃねえか、お陰でこのとおりの、五臓六腑わるいところなんざ、どこもありやしねえ。少々酒の度が過ぎて二日酔いすることもあるんだが、それが珠に瑕さ。

でも、若けえころからの飲み垂らしじゃなかつたんだぜ。大工に弟子入りしたころなんざ、酒など一滴も口にしねえで、真面目に働いたもんだから棟梁の信望もあつたさ。一端の職人になったころには、ひとり娘に三味線やら踊りを習わせて、お隣さんも羨むほどの暮らしぶりだったよ。ところが、少しばかりゆとりができると、岡場所通いや博奕遊びと浮気心もであらな。

呉服問屋の建前の大盤振舞いによばれて、無理に飲まされた酒がいまでは旨くてやめられねえ。酒なしでは仕事が手につかねえほどになっちゃった。棟梁に隠れて飲んだ酒が禍いして、棟梁のつけた墨を切り落としてしまったのがおちさ。棟梁にこっぴどくどやされたあげくの果てに勘当されちまつたけれど、さすがに棟梁は弟子思いだぜ。博奕の借金を清算して、さしあたっての暮らしにと、ポンと五両くれたんだからな。

おいおい、娘さんどこに行きなさる。そっちはさっきの河原じゃねえか。危ねえ危ねえ、早く戻りなせえ、馬鹿なことをするんじゃねえよ。

よく見りや、あつしの娘と同じ年頃じゃねえか。何とかしてやりてえが……。

ええい、しかたがねえ。

どうせ、あつしには入り用のねえ金子だ。遠慮しねえでとときな。五両しかねえが、あとの残りは国許のちゃんに工面してもらいな。お志乃と云ったかい。通りすがりのおひとに、すまねえなんて遠慮しねえで、さつさと受け取りなよ。

それから国許へ帰ったら、ちゃんとおつかあにたと親孝行してやんな。そういうことなら、あつしは本望なんだからさ。

おいおい、そんなに嬉し泣きされちゃ、照れ臭せえじゃねえか。

あつしなんぞは、名を名のるほどの者じゃねえんだが、かあと娘に見捨てられた甲斐性なしの、大工の長吉つて云うんだ。この広い江戸の町だもの、あとは何とかならあなあ。

おい、こら。なんて、肩をこづきやがんのは誰れだい。柳の下で気分よく眠りこけてんのに、何の用だい。

おや、なあんだ。材木問屋、美濃屋さんのご隠居さんじゃねえか。だらしがねえなんて、よく云ってくれるねえ。どうせ、あつしは大工の棟梁に勘当された身だよ。材木とはきっぱり縁がきれたんだから、お節介染みた説教なんてよしてくれ。解き放されたワン公のように、右に左にはしやぎたい気分なんだからさ。

なに、大工の棟梁がこぼしてたって。

長吉は酒に溺れて始末にならねえが、腕は二人分の働き者だって。そんなこと、今更なにを云ってんだい。それならそうと、あんときに云ってくれたらどうなんだい。それがあんなときはこうだぜ。

てめえみてえに酒と博奕じゃ、間違えのおこらねえのが不思議だ。女房や娘に難儀させるのもあたりめえな話だ。墨を間違えて柱を切り落とすなんざ、大工職人もおしめえだな。世間は広い、どこかで面倒みてくれる奇特なお方もあろうから、なあんで云ったくせに。今更あつしの腕が惜しいなんて、

そんな情けを云われると、ふん、笑わせるねえ、目頭が熱くならあ。

そうかい、そうかい。なんなら、あつしの足元に両手をついて、長吉、勘当してすまなかつた。酒を断てなんて無理難題云わねえから、どうかもう一度、おれの片腕として働いてくれねえか、とか何とか云って詫びにきなと、棟梁に伝えてくんな。なんだい、ご隠居さんのその呆れたような目つき。

「棟梁の恩を仇でかえす奴がどこにある。そんなひねくれ根性だから、勘当されるのがあたりめえだ」

あつしの気持ちも知らねえで、よくもそんな薄情なことを云えなすつたな。ようく聞いておくんなせえ。ご隠居さんだって、ご存知のはずじゃねえですかい。

このごろの江戸は、瓦屋根やら土蔵づくりがやけに増えちまって、火事がすくねえ。だから普請もめつぼうう少なくなつて、材木が有り余る。風が吹けば桶屋がもうかるじゃねえが、材木屋さんと大工の棟梁とてその筋の仲間。不景気だからって、働き盛りの長吉に難癖つけて見限るなんざ、ひとさまのやることじゃねえや。

おや、顔色が変わったねえ。思いあたる節でもあるんですか

い。何か云い足りねえことがありそうだね。この際だから全部聞いてやろうじゃねえか。何でも云いなさいよ。耳が遠い。膝が痛い。あとはなんだい、そうそう、向島のお妾さんと縁を切りたい。どうだい、まだ何かあつたかい。

「これ、長吉。たわごと云ってんじゃないよ、酒が入ったからって、許しやしないぞ」

女房や娘の食い扶持をどうするんだって。そんなこと、あつしが知るもんかい。かかあなんかあれだけ、仕事を終えて息抜きに茶屋で一杯ひっかけ帰ってみりや、箒を片手に目尻をつり上げて、女房と酒とどっちとる、なんて云いくさつて、あつしの尻を叩きやがる。そりや、かかあがいいと云つてみたつて、酒はやめられねえ。三日三晩、のそり歩いて家に戻ってみりや、かかあと娘の姿が見えねえ。愛想つかして家を飛び出しやがつたんだぜ、たぶん。

なになに、あつしの娘がご隠居さんに泣きついた。手をついて美濃屋さんへの奉公を頼んだ、とでも云うんですかい。あの箱入り娘がですかい。まだ子供だと思っていたら、驚いたねえ。しっかりしているところなんざ、ちゃん似だよ、まったく。

はて、さて、まさか。ご隠居さん、芝居を打つてあつしを

騙しているんじゃないやなろうね。それとも何だい。こまめに働く奉公人ができて、助かつてると云うことかい。そりやそうだろうさ、あつしの娘だもの。

御祓箱になつたちゃんの代わりに、たすき姿にあかぎれこさえて働くなんざ、なんと不憫な娘じゃねえか。世の中が不景気だか何だか知らねえが、ちくしょう、涙がでてきやがつた。

「長吉。酔いをさまして、棟梁に詫びを入れろ」

なに云つてんだい。陰でこそそそ愚痴つてるしみつたれのところなんぞに、あつしが悪うございました、これからは浅草の観音さまに誓つて、真面目に努めさせていただきます、なんて口が裂けても云えるかえ。

えつ、なんだつて、もっと大声で云つてくん。娘は美濃屋さんじゃなくて、品川宿の茶屋に働いていると云いなすつたね。これは聞き捨てならねえ。奉公とは岡場所のことじゃねえですかい。そいつは何かの間違えでやしよ。そんなこと、この長吉が許すはずがねえですよ。

まさか、ご隠居さん。娘をたぶらかしたのではあるまいな、どうだい凶星だろう。おや、ご隠居さん。その顔はまるで鬼面だよ。その面下げてあちこち歩いたら世間さまが驚くぜ、

とうとう本性を曝け出したって。そんなことになったら、先代からの信用を失って、ご隠居さんどころか身代まで傷つくよ。

「これ長吉、口がすぎるぞ」

痛てっ、ご隠居、なにすんだ。杖で何度も、力まかせに打つとは何の真似事だい。背中がみみず腫れだよ。

おお痛てえや。あつしはね、ガキのころよく、ちゃんに叩かれたもんだ。だから杖ぐれえで驚きやしねえよ。だけんど、ご隠居の杖は、ちゃんを思い出して背中の中の痛みが懐かしいや。ああ、おらあ、なんだか無性に悲しくなってきたやがった。

そうですかい、娘は、気丈におっかさんを頼むなんて、生意気な口を利きやがったんですか。

長吉。娘が可哀相なら真面目に働けなんて、折檻されても、仕事のねえ御時世だ。どこで何をすればよいのやら……。

ご隠居さん、このとおり頭を地につけておりやす。どうか、娘だけでも面倒みてやっておくんねえ。

勝手にしろ、しみつたれ、なんて云って、邪険に振らねえでおくんねえ。あつ、待ってくれ、ご隠居さん。おい、待て、こら、隠居……。呼んでみても、何のとこだい、振り向きもしねえで、角を曲がってしまいやがった。噂どおりにケ

チの看板背負って、見苦しいねえ。

四

ちくしろう、ちくしろう、何しやがんだい。あつしを突き飛ばしておきながら、逆恨みにかかって来るとは、御門違いだぜ。あつしが駕籠昇きの先棒さんを邪魔したと難癖つけるが、ここはあれだぜ、天下の街道だよ。

先棒さんが、もうちつと前を心配ってくれりや、あつしを避けて通れたはずなのに、町娘なんぞに横目を使うからこんな面倒なことになっちまうんだ。あつしを叩いて気がすむなら、それがかまいやしねえが、客人を駕籠からほっぽり出して、客にどやされたとなりや、見るからに情けねえ失態だねえ。どっちが悪いか、ひとつ周りに聞いてみようじゃねえか。ええつ、そりやねえですよ。そこの旦那に、ご新造さんよ。おまえさん方は、あつしが吞兵衛の甲斐性なしだからって、嘲笑うんですか、見捨てるんですか。ああ、わかつておりやす。どうせ世の中こんなものじゃねえですか。

ほれ、見てみな。駕籠昇きさんがますます勢いづいてしまいやがった。棒をふりあげてあつしを叩く気がい。執念深い

ねえ、地獄に落ちるよ。いくら蹴られても叩かれても降参などしてやるもんか。それに、この徳利を割ったら承知しねえよ。いぎ鎌倉となりや、ひとりやふたりひと捨りなんだから、と云つてもこの酔態では適わねえなあ。

おい、おい、こんどはあつしを駕籠に括りつけてどうしようてんだい。頼みもしねえ文無しの長吉さんを運んで行く先きやどこだい。まったく呆れるねえ。それにこんな早足で、道行くひとが不思議がつて振り向いてるぜ。

「酔っ払いが、ころげ落ちねえように駕籠に括りつけたんだ。疑う奴なんか誰もいやしねえぞ」

ほんとうに身勝手な思い込みもいところだねえ。そう云うことなら、よおくわかった。あつしから徳利を取り上げねえのは、人目を誤魔化す魂胆か、たちの悪いやりかただねえ。街外れて久しく走りや、人も通らねえ、芒が茂って寂しいところで、縄を解いてどうしようてんだい。

こらこら、あつしの羽織に手をかけるやつがどこにある。これじゃまるで追剥じゃねえか。あつしのような着の身着のままから剥ぎとるなんざ、みみっちい了見だぜ、まったく。おい、離さねえか。これいじょうあつしに触れたら、思いつきり五指を噛み千切つてやるからな、と啖呵をきつても二人

にひとり。それにあつしは千鳥足。とても勝ち目はねえなあ。こうなつたらこんな着物いさぎよく脱ぎ捨てて、くれてやらあな。

さあ、持つて行け、さっさと持つて行きやがれ。さいわいにも徳利と腹巻に手を抜くなんざ、あの雲助にもいいところあな。

遠くにお寺の鐘の音が聞こえてらあ。

鈴虫が鳴いて、尻丸だしじゃ肌冷えするわい。今宵はあのお寺の床下にも厄介になるとするか、ちくしようめが。

五

寄つておくれよ。なんて袖を引かれたつてその手は喰わねえよ。どうせ目当ては懐の金子じゃろうが。

もう手遅れだつて云つてるじゃねえか。金子は奥州の娘にくれつちまつて、びた一文ありやしねんだから。それでもよければ、付き合つてやつてもいいぜ。そりや、おまえさんが唄えば手拍子ぐらい叩いてやらあなあ。

なに、それでもいいつてかい。それから云つとくけど、この徳利の中身だけはやれねえよ。これはね、かかあより娘よ

りだいじな酒なんだから。だってそうじゃねえか、酒は小言を云わねえばかりか、心を癒してくれるんだもの……。

これは、こざっぱりした座敷じゃねえか。見たこともねえ六人のご老人と三味線の姐さんがひとり。車座になって、あつしを仲間に入れてくれると云うんですかい。そりゃ、ありがたいねえ。あつしもねえ、かかあと娘に愛想つかされて、ちと寂しい思いをしていたところなんで。

おや、座の真ん中にあるのは酒甕じゃねえかい。酒の匂いを放ってすぐわかったよ。どれどれちよいと匂いを嗅がしておくれ。

うむ、うむ、鼻が痺れるようないい匂いだねえ。いいから、早く座れってかい。あいよ。

これがあつしの座布団だと云うんだね。徳利なんて手放して、酒甕の酒を飲めって云うことかい。

あいよ、あいよ、それじゃいただくよ。

ああ、旨めえ。五臓六腑に染みわたるねえ。

やや、これは鯛の刺し身じゃねえか。鯛の刺し身なんぞ、久しく食べたことがなかったなあ。それじゃ、遠慮なしにいただくよ。こりゃ旨い、舌がとろけそうだ。酒も美味しい、肴も美味しい。

今夜は珍しいお客さんがきて酒盛りが賑わったと云うのかい。そう云ってくださると、あつしも嬉しい。頼まれれば明日の晩にもお呼ばれしたい気分だぜ。

なになに、明日の晩も待ってるって、ありがてえねえ。きつと寄らせてもらうからね。ほんに姐さんの三味線には浮かれるねえ、踊りだしたくなっちゃうよ。吉原の姐さんなんぞ、足元にもおよばねえ、そうだ、あつしの娘にも聞かせてやりてえくらいだよ。

かまわねえから踊れってかい。そうかい、尻をはしよって一丁やってみつか、と云っても腹巻姿じゃ、はしよる尻もなかったか。みなさま方が七福神のようななふくよかな顔をしてっから、ますます気分が乗っちゃうよ。てんつく、てんつく、てんつく、てんのでん。

ああ、ほんのりと汗をかいて心地よい。もう一杯いただきたい気分だが、そんなに急かさず少し休ませていただきたいねえ。

六

おや、はて。

あつしはいま何処にいるんだい。すっかり酔い潰れて、目が覚めたとおもいきや、どこからともなく差し込む蒼い月影。天井に張りめぐらされた蜘蛛の糸。崩れかけた壁を支えた朽ちた棺桶。倒れかけた塔婆が並んで賑わって、耳を澄ませばかすかに読経が聞こえる、ここはなんと薄気味の悪い荒れ寺の内じゃねえか。

のど仏が焼けて水が飲みてえと思つたら、いい案配に酒甕があらあなあ。ちくしょう、頭がふらついて起き上がれねえ。ようし、こうなったら酒甕の淵にしがみついてでも起き上がってみせるぞ、まだ五十そこそこだ、底力は残つてらあ。おやおや、この酒甕はどこかで見覚えがあるぞ。そうだ思ひだした。夕べの宴会の座敷のど真ん中あつた酒甕に違ひねえ。こんなところにほっぽりだしてもったいねえなあ、まったく。水のかわりに酒のご馳走とは、ほんにあつしも運がいいわい。おや、酒甕の中に誰かいるぞ。しきりにあつしを見つめてらあ。

おい、おまえさん。呼ばれたら返事ぐらいしたらどうだい。ずいぶん頬がこけて、眼が窪んで、なんと醜い容姿。まるで骸（むくろ）じゃねえか。

おやおや、骸が驚いた顔をしたと思つたら、笑いやがった。

ちよいと酒を失敬したいのだが、いいかね。

そういえばおまえさん。酒甕の中で暮らしてちや、窮屈で仕方あるめえ。あつしが引き上げてやらあなあ。何の彼の云つたつて、娑婆よりいいところありやしななんだからさ。さあ、遠慮せんと、この手をしっかりと握つてくん。ぐずぐずしていと月が陰つて、おまえさんを見失なつちまうよ。

おや、おやおや、手を伸べても、搔き混ぜても、酒がごぼごぼ鳴るだけで、酒甕の中には誰もいやしないじゃないか。可笑しなこともあるもんだねえ。てえとすると、さっきのあれは何だね。酒甕の中で笑いやがったのは、もしかしてあつしの顔だと云うんだね。それにしてもこの世のものとも思えぬほど、醜い顔だったねえ。そう云うことなら、安心して酒をちようだいするよ。ああ、よだれがでるほど旨めえなあ。だけど、こりやなんだかへんな味だぜ。酒かと思つたらどろどろに腐つた雨もりじゃねえか。なんだか臭せえなあ、まるで死臭がただよっているようだ。

ありや、ありや、誰もいねえと思つていたら、そこにひとり、ふたり、さんにん……。全部で七人も寝入つてらあ。

おいこら、起きなよ。大工の長吉さんだよ。おや、おまえさんの顔はまるで骸だね。そういえば、お隣さんも、お隣さ

んもみんな骸じゃねえか。気分よきそうな寝顔を見入ると、あつしも、ついうとうとまどろんでしまいそうだ。こつちの隅はあつしのねぐらに陣取るよ。

はて、かすかに読経の音が聞こえる。だんだん大きくなってきたよ。夕べの三味線の音色とは一味ちがって、読経は心が落ちつくねえ。旨めえ酒をたらふく飲んで、読経を聞きながら眠るなんざ、本望かもしれねえよ。骸の仲間も極楽浄土な気分で横たわっているのかもしれない……。

七

極楽気分で横たわっているのに、揺すり起こすやつがどこにある。おや、おまえさんは、あつしの娘じゃなかった、いったい何処のどなたさんだね。

「お志乃と申します」

知らねえなあ。それに、ここはどこだい。身体がきしんで起きられねえのは、てんつくてんのあの踊り疲れのせいじゃねえか。じゃが、何が何だかさっぱり覚えてねえや。

お志乃か、気のきく娘だねえ。額を冷やしてくれたあげく、ちゃんと水まで酌んでくれてさ。はやくその水を飲ませてく

れねえかい。ああ、旨めえ。水がこんなに旨めえとはしらなかった。

身売りされたところを、あつしの金子に助けられた。だから、あつしは、おまえさんの命の恩人ってことかい、さっぱり思いだせねえな。

はてな、はてな、五両……。

そうだ。棟梁からいただいた金子を思い出したぞ。お志乃という娘にくれてやったが、その娘さんが国許に帰えらねえ、なぜこんなところにいるんだい。

「街道の宿場で休息していると、荒れ寺のなかで男が死んでいる。黒い貧乏徳利を抱きしめて、あれは酒に溺れて死んだのじゃと、地元のお百姓さんの噂を聞いて、もしや、と思いました」

貧乏徳利と聞いて、この荒れ寺を覗いてみたってことかい。貧乏徳利なんざ、よくぞおぼえてくれたねえ。それが、あつしじゃ、さぞびつくりしたろうに。

して、女衞は金子を懐にしまいこんで、姿をくらましたというのかい。そんなことだろうよ、銭にならねえ娘なんざ、邪魔者なんだからさ。

ああ、思い出した、何もかも思い出したぞ。酔っぱらいの

あつしは、駕籠に括られ、こんなに遠く運ばれて身ぐるみ剥がされちまった。世の中、油断も隙もありやしねえんだから、まったく。

それじゃ、荒れ寺のなかで虫の息のあつしを看病して、助けてくれたのはお志乃かい。てえってことは、命を助けられたのは、あつしじゃねえか、ありがてえこつた。

どれどれその徳利。おや、まだすこし残ってらあ。好きなものなら飲んでみなくてかいかい。ありがてえなえ、酒はね、あつしの活力なんだよ。どれどれ胡座をかいて徳利をくわえて、一杯いくぜ。

「わあ、わあ、こりやなんだい。酒かと思つたらどろどろに腐った雨水じゃねえか」

思い出したぞ。そこらに骸が、骸が七人転がっているはずじゃが。よく探して見。いねえのかい、姿が見えないなあ。

お志乃、頬をつねってくれ。おおつ、痛てえや。てことは、あつしはまっこと娑婆に戻つたのだ。酒は命取りになるってことかい、恐ろしや、恐ろしや、こんな化け寺ははやく逃げだそう……。

お志乃は奥州岩代国、あつしは材木町甚平長屋とお別れだな。

「あら、長吉さん徳利を忘れてきちまったよ」

いいや、あれは忘れてきたんじゃねえよ。荒れ寺に捨ててきたんだから、もういらねえんだよ。どうした、嬉しそうにはしゃいでさ。

「長吉さんは、おとつあんののような気がします」

心配するなって、お志乃のおとつあんだって、娘の顔みりや、心を入れかえて真面目に働いてくれるさ。あつしも、かかあと娘を泣かせるようなことは金輪際しねえからよ。だから安心して日の暮れねえうちに、さつさと立ち去りな。あれ、まだ手をふってやがる。

おーい。達者で暮らすんだよ。身も心も軽くなったと思つたら、もう浅草の観音さまじゃねえか。ひと混みのなかで親子連れが笑ってやがる。あつしら親子にもあんな頃があつた、ほんになつかしいなあ。

それじゃ、棟梁を訪ねるとすつか。いやいや、いさぎよく諦めるんだ。揮一丁でも、その気になりや大河普請のもっこも担げるさ。昔のような働き者の長吉にもどって、かかあと娘を迎えにゆこう。

道々、思いをめぐらすと、なんだかしらねえが、ちくしよ、涙があふれてしかたがねえわい。はっ、はっ、はっ、はっくし

よ
ん。

(酒甕と骸
了)